



## 現地に学ぶシリーズ

### 市町村合併により

# 日本で一番大きな市になった高山市を訪ねて (PART 1)

長谷川 洋二 (研究所事務局長)



東海自治体問題研究所は、8月26日、27日に、高山まちづくり研究会準備会のみなさんの協力で、1泊2泊の現地に学ぶシリーズ「市町村合併により日本で一番大きな市になった高山市を訪ねて」を開催しました。

1日目は、午後1時に新しくできた駅舎のJR高山駅に集合。バスで、飛騨川沿い走る国道361号線の道の駅「飛騨たかね工房」まで移動。道の駅の部屋を借りて、高山市高根支所の職員と高根まちづくり協議会の職員から、高根地区についての説明を聞きました。

高根地区は、乗鞍岳、御嶽山にはさまれた地域であり、森林率は、95.9%です。高根地区の面積は220.66k㎡(東西18km、南北20km)で、187世帯341人(2017.8現在)が人々が住んでいます。集落は11あり、1集落には4人から105人の方々が住んでいます。高齢化率は56.3%です。2005年の合併時には647人の住民がいました。合併前には、村役場職員、学校の先生などが60人ほどはいました。合併後は村役場が支所に、合併前には小学校が2校、中学校が1校ありましたが廃校になりました。現在の小中学生は、隣の朝日地区にある学校に通学しています。高根支所の職員は現在10人になっています。また、今まで住民の足として飛騨バスが走っていましたが、2017年3月には赤字のため廃止となりました。住民が病院や買い物に行くための足がなくなり、高根地区は、公共交通ゼロの空白地域となっています。そのため、高根まちづくり協議会が専属の運転手3人体制で10人乗りのワンボッ

クスカー2台(リース)で「のらマイカー」の運行を2017年4月1日からはじめました。

産業は、農業(ほうれん草、とうもろこし、そばなど)、畜産業(飛騨牛)、観光業(キャンプ場、スキー場、野麦峠など)です。1千万円を超える収入をあげている農業者もいますが、後継者がいないという問題があります。

こうした説明を受けた後、標高1,200mを超える日和田高原に移動し、高地トレーニング施設を見学しました。この施設は2016年度で全国から324団体、27,169人が利用しています。青山学院大学をはじめとした大学、高校、実業団の陸上部の選手たちが、心肺機能を高めるため、合宿などを利用しています(施設の見学をしている時、青山学院大学駅伝部の監督がTVの取材を受けていました)。

この施設は、材料を持ち込み自炊で合宿できるので、地元参加者からは「せめてほうれん草だけでも地元産を使用してもらえるといいのに」という声が出ていました。

高地トレーニング施設の見学後、寒暖差を生かした高冷地野菜のほうれん草のハウス栽培の現場を訪問し、地域ブランドとしての取り組みを進めている「タカネコーン」づくりの話の話を聞きました。クマは出るけど、シカなどの獣害はまだないが心配だという声がありました。乗鞍岳も御岳もきれいに見える中で、美味しいタカネコーンをいただきました。